



誠・力・光

令和4年1月20日
練馬区立北町中学校
学校だより 1月号

真っ白な新年というキャンパスに向かって

校長 中嶋 雅彦

新年の始め、東京では数日は例年のように青空に、厳しい寒さが続くという天気でしたが、6日には、南岸低気圧による雪が降りました。夕方には、辺り一面が白一色となりました。雪に慣れていない都心では、交通網のマヒや転倒事故などのニュースも流れました。このような雪景色は日本では、古来より厳しい寒さとはいえ冬の情緒あるものとして考えられてきました。百人一首の一つとして知られている坂上是則作の「朝ぼらけ ありあけの月と 見るまでに 吉野の里に 降れる白雪」が頭に浮かんでくる令和4年の始まりでした。

中学校において1月は、年の始まりとともに3学期の始まりでもあります。今学期は学期の中では最も短く、生徒には、各学年のまとめとともに次年度の準備をしっかりとさせなければならない重要な時期です。年度当初にお示しした学校経営方針や今年度より全面実施となった学習指導要領、さらには、全校生徒に配布されたタブレット端末の活用など、それぞれも目標に向かった取り組みも充実させ、子どもたちの真の生きる力とさせていきます。すべての教科で3観点による評価を行うことにより、教師が各教科によって伸ばす各観点の能力を確実に捉えることにより、授業改善につなげていき、評価と指導の一体化を推進しています。学習面だけでなく、5つの育てたい生徒像の1から3までをこの3観点と関連させ(1)主体的に学びに向かう生徒(自主性・意欲・向上心・粘り強さ)(2)未知の状況にも対応できる生徒(思考力・判断力・表現力)(3)進んで働き、協調できる生徒(基礎・技能・協調性)としすべての教育活動の場面でこの3観点を活用することによりその充実を図ってまいりました。また、ICTを活用した授業(全教科)を積極的に取り入れ、生徒一人一人を生かし、わかりやすい授業の工夫と改善を目指し、感染症予防における休校時などの対応にも備えてきました。昨年末にいただいた保護者の皆様からの学校アンケートを十分に生かし、北町中学校の新年の目標に向かう決意です。

また、3学期は、校外学習、連合ダンス発表会、スキー移動教室、合唱コンクール、修学旅行などたくさんの行事等も実施いたします。感染症予防においては、これからも国、都などの指針を参考にし、年度当初練馬区から出されました「練馬区立学校改訂感染症予防のガイドライン」に則り基本的な感染症予防を引き続き徹底させ対応してまいります。保護者の皆様のもっと行事などの教育活動を充実させてほしいという気持ちも大切に、そして、コロナウイルスに不安を感じ安心、安全な学校生活を望む気持ちも考え、学校経営を行ってまいります。制限のある教育活動が続きますが、今後も保護者地域の皆様のご理解とご協力を賜り、よりよい北町中学校を創ってまいります。

校内書き初め展

金賞	1年	金森 映美	小畠 悠	塩手 美優	宮本 桃恵		
	2年	小林 メイア	末松 奈也	阿部 結心	高梨 陽菜		
	3年	青山 舞穂	大賀 菜々美	小林 アリア	保谷 幹太		
銀賞	1年	安倍 あかり	渡邊 瑠菜	河野 衣里	鈴木 淳平	本間 詩乃	
	2年	関根 翠	松原 朱里	小島 幸真	畑 凜奈		
	3年	松本 笑果	小野 優花	村上 統美	福井 心華		
銅賞	1年	土屋 麻莉亜	村田 聖夏	木下 陽大	古賀 優那	齊藤 陽夏	
	2年	古田 梓泉	大木 陽菜子	松澤 吏都	岡田 紗希		
	3年	篠原 りか	山田 龍人	大野 陽向子	依田 麻友子	鎌澤 悠愛	

練馬区教育委員会生徒表彰

- 2-3 栗原 樹 ラグビーにおいて表彰
- 3-3 河内 賢斗 空手において表彰

連合ダンス発表会

感染症対策により中止となりました

1年生校内ダンス発表会において、1年4組が選出されました。各クラスとも見事なダンスでした。

感謝について

毎日過ごしていると、自分の力だけで物事が動き、成功していると思うことがあります。周りの存在に気付くことや素晴らしさに気付くことが、感謝につながります。「人に感謝しなさい。」と言っただけでは周りの人の存在を認め、感謝の気持ちが生まれる訳ではありません。そこには気付かせることが大人の役割だと思います。

3年生は、今受験の真っ最中です。そして、もうすぐ義務教育が修了します。(1, 2年生はいずれこの時期がやってきます。) 15年間を振り返り、『感謝』ということばをどう感じ取りますか。

少し前の話になりますが、「校門を入ったらたくさんのお花で生徒を迎えたい。」という主事さんのことばで花をたくさん植えました。これを聞いて何を感じるでしょうか。すぐに何かを感じる子もいれば、2, 3年後に感じる子もいるでしょう。「人に感謝しなさい。」というよりも、繰り返し周りの存在を伝え続けるほうが、よっぽど生徒たちの心に届くのではないのでしょうか。

(文責 副校長 岩本)